

まず大きな円で囲まれた男性集団があります。その中にはパワーゲームがあって、男らしさの定義や、男らしさの境界のコントロールが行われています。男性集団の中では、ホモエロティズムを抑制しないと男が性的客体化されるリスクがあるため、ホモエロティズムを抑制しない男、つまり同性愛の男はここから排除されます。したがって、ここには互いを男と認め合った者同士がいることになります。

では女はどこにいるか。女は円の外側にいます。女にとって男に選ばれるということは、たった一人の男と結ばれるように見えながら、実のところ、その男を通じてホモソーシャルな男性集団の中に指定席を得ていることになります。ホモソーシャルな集団の男たちの中には一定の契約があります。それは、一人の男に選ばれた女には、建前上（あくまでも建前上）他の男は手を出さないということです。ただし、そこから外れた女には、何をやっても構わないという潜在的な娼婦性を付与します。誰にも属さない女は、誰にでも属することになるからです。夫と死別離別した女性が、他の男たちからの無遠慮なアプローチの対象になるのはそのためです。

女たちは、男に選ばれる可能性があるという意味において、潜在的にライバル関係にあります。自分以外の女は自分にとって常に潜在的なライバルですから、「女同士の間には友情は成り立たない」とか「女の敵は女だ」などと言われます（言っているのは男ですが）。そういうわけで、友情なるものは男の独占物ということにされてきました。

この図は本当ならば3Dで表現したい。というのも、男性集団の男たちは全員が同列ではなく、パワーゲームによる序列があるからです。そして、女は、序列のボトムにいる男よりは、トップにいる男に選ばれたいと思う。これで、アルファオスに女たちが群がる理由が説明できます。

・・・私は時々男にとって最も官能的な喜びとは何だろうかと、と。おそらくそれは、自分が力を認めたライバルと鏝迫り合いをして、ぐっと踏み込んだときに、相手から耳元で「おぬし、できるな」と囁かれたときの続々するような快感でしょうか。それは女から「愛している」と言われた時などとは比べものにならない喜びだろうと、私はかねがね思っています。